

# コンサートホール発 世界へ飛翔 京都のクラシック音楽

(写真左から)

京響常任指揮者

井上 道義さん

京都コンサートホール特別専門委員・パイプオルガン奏者

鴛淵 紹子さん

京都市立芸術大学助教授・チェロ奏者

上村 昇さん

井上 道義(いのうえ みちよし)  
1946年東京都生まれ。桐朋学園大学卒業。1971年第6回グイド・カンテリ記念指揮者コンクール優勝。ニューヨーク国立交響楽団首席客演指揮者、新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督を歴任。1990年から京響音楽監督・第9代常任指揮者。

鴛淵 紹子(おしぐち つぎこ)  
1930年京都市生まれ。同志社女子大学卒業。アメリカ・ルイス・アンド・クラーク・カレッジに留学。イーストマン音楽大学大学院にてオルガンMM学位取得。藤堂音楽賞受賞。1971年から同志社女子大学教授。1993年から市音楽芸術振興財団評議員。1995年から京都コンサートホール特別専門委員。

上村 昇(かみむら のぼる)  
1952年千葉県生まれ。京都市立芸術大学卒業。1977年日本音楽コンクール優勝、京都市芸術新人賞、1978年関西クリティッククラブ新人賞、1979年カサド国際コンクール優勝、1983年京都府文化賞、1987年京都音楽賞受賞。1983年から京都市立芸術大学助教授。



●市民をはじめ、多くの音楽ファンが期待していたコンサートホールが完成しましたが。

井上 僕もこのホールを待ちながら京響のメンバーと5年間過ごしてきました。大ホールは靴箱型で音響が良く、聴衆も「音に包まれる」と思いますよ。先日来、何回も試し弾きをして、直すべきところは直し、今は初めの期待以上になっています。

上村 大ホールは1800人収容で、本格的なオーケストラの演奏が楽しめますね。小ホールは500人位だから、室内楽には最適なスペース。ソロコンサートやカルテットなど繊細な室内楽の良さが存分に満喫できると思えますよ。

鴛淵 私はパイプオルガンができたのが心からうれいんですね。しかも、日本で最大級のものなんです。これまで、京都にはパイプオルガンが、同志社栄光館と市内のいくつかの教会にしかなく、公共のホールにはありませんでした。パイプオルガンは歴史が長いにもかかわらず、教会の楽器、宗教音楽というイメージが強く、一般の人には馴染みにくかったんです。だから、このコンサートホールにパイプオルガンができたのは、大変素晴らしいことだと思いますね。

井上 教会の宗教音楽というスタンスを離れ

ての、感動的な響きが楽しめるということですよ。

●コンサートホールがこれからの京都の音楽文化に与える影響も大きいですね。

井上 人間の耳にとって、きつと目にも、環境すべてが楽器そのものですから、良いコンサートホールというのは何百の良い楽器に匹敵するんです。京響はもちろんのこと、世界的なレベルのオーケストラや演奏家が喜んで演奏したくなるでしょう。京都にもやっとな環境を整ったといえるわけ。

上村 京都にも音楽ファンがたくさんいますよ。芸大でも公開講座を開催しているんですが、アマチュアの人々が熱心に行っているんです。自分で楽器をやるといふ人は、本当に音楽を楽しんでいるんですね。知人にピアノをやっている人がいるんですが、演奏会を開くのを半年も前から楽しみにして。プロの演奏家のようにはできないけれど、自分が音楽を楽しむためにスコアを勉強するんだ、仲間とも演奏したい、というんです。CDを聴くよりもライブを聴く。音楽を百倍楽しむんだ、なんて。

鴛淵 ホールが楽器の一部という意味でい

ば、やはりいいホールで演奏したいですね。

井上 ヴァイオリン一つあれば、地下道や広場でも弾けるんだけど、まわりにいろんな音が転がっているので10分も聴いていられないでしょう(笑)。やっぱり聴く環境が大切ですよ。

コンサートホールが完成して、京都の音楽状況は、やっとな序曲が終わり、これから第一章が始まるってことですね。京響が発足以来、40年間やってきたことは、これからの準備期間だったんです。世界文化遺産、京料理、漬物、それにももちろん京女に続けというわけです(笑)。

鴛淵 井上さんは前奏曲が終わった、とおっしゃいましたが、パイプオルガンはまず、前奏曲から始めないといけないから大変。どんな演奏会を企画するか、どういうふうを活用していくか、いろいろ考えているんです。

でも、このパイプオルガンはとても素晴らしいんですよ。ドイツのクライス社の製品ですが、フランス人のパイプオルガン鑑定家が関わっているんです。つまり、ドイツ的な音色とフランス的な音色が組み込まれているので、多彩な音楽表現ができるんです。

井上 ヨーロッパでは昔からドイツとフラン

スの2つの大きな潮流があるんです。時代によって少しずつ違いますがね。ドイツの曲は「ウォー」、フランスは「バーン」という感じ。ひと言でいえばそんな違いがあるんだけど、この違いを超えて協力できる時代になってきているんです。

鴛淵 そうですね。鑑定家というのは、パイプオルガンに関する知識が非常に豊富で、こういう場所にはこんなパイプオルガンがよいとか、響きはどうあるべきかとか、そういうことが言える人なんです。かつてバッハがその仕事をしていたそうですが、日本にはいないんですよ。

井上 いわば、ワインにとつてのソムリエですかね(笑)。

鴛淵 現在は電気で送風していますが、以前はふいごで風を送っていたんです。このパイプオルガンの特徴は、そのふいごの装置もつけていることなんです。電気的な装置は風圧が一定なのでいいんですが、あまりにも機械的。ふいごは手作りの風というか、ちよつとフアーと呼吸するような感じで面白いんですよ。それに、和楽器の尺八や笙、ひちりきなどの音色を使った演奏ができるんですよ。

●クラシックの土壌をもっと広げるために考えておられることは?

鴛淵 これからいろんな人にパイプオルガンを聴いてもらいたい。とりわけ、子どもたちに聴かせたいですね。

上村 子どもたちにも自分で音を出してもらって、どんな響きがあるのかを体験できると面白いかもしれませんね。自分で弾いてみて実際に自分の体で響きを確かめる。そして各



席で聴衆として聴いてみるとか。そんなチャンスがあってもいいかなと思いますね。  
 鴛淵 子どもの頃に本当にいい音楽を聴けば後々まで印象に残って、その楽器をやりたいかなという事は、往々にしてありますね。同志社女子大にも音楽科・オルガン専攻があって、協定校の生徒が修学旅行で来ると、私はパイプオルガンを聴いてもらうんです。それが印象に残るのか、パイプオルガンを始めたという子もいたり。いいコンサートホー



ルでいい音楽を聴く。そのチャンスをつくることは、これから必要だし、私たちの使命としてやらないといけませんね。  
 上村 父親が京響ですつとチェロをやっていたので、僕も子どもの頃からチェロの練習をさせられました。途中、ジャズや軽音楽の方に気持ちが向いたのですが、和音の基礎をきっちり勉強していた方がよいと思って、結局、京都芸大に入って再びチェロを始めて。そして、大学時代、京響の「第九」の演奏会に合唱団の一員として参加したんですが、このとき、「第九」の「第三楽章」を初めて聴いたんです。「緩徐楽章」といつてゆるやかな曲なんです。ベートーヴェンの曲というところからイメージを持っていたのですが、これを聴いて、それまで知らなかったあたたかくて優しさのあるベートーヴェンの世界に触れたような気がして、感激しましたね。そのときのエネルギーというか、衝撃が後々まで人生に影響を与えましたね。  
 井上 上村さんと違って感激で音楽を始めたんじゃないけど、確かに僕にはいい環境があったらしい。例えば、小学校の卒業式の後、同級生のピアノ連弾といっしょに僕がドラムを叩いて、シューベルトの「軍隊行進曲」をやったりしましたよ。可愛いでしょう？

鴛淵 私が小学生のとき、同志社栄光館にパイプオルガンが入り、そのオーピングコンサートを聴きに行ったのですが、かなり強烈な印象を受けて。それが演奏家になることに結びついたのかもしれないね。  
 井上 いい環境といい音楽。そういう場に中学や高校の感受性豊かな年代の子どもたちを引っ張り出したいですね。学校の授業の一環としてだけでなく。京響は十数年前から、巡

●京都市立芸術大学の合唱団として参加

回コンサートを行っています。ふらっと歩いて行くので、市民の文化の向上に大きく貢献していると思っています。でも、近くの車の音が混ざってしまった。やはりいい環境で演奏していくことが大切だと思いますね。  
 近く歩いていく場所、そしていい環境の中で聴ける。そうしたことが両立できれば、と思いますね。それと、このコンサートホールを京響の専用ホールとはいいたくないが(笑)、できるだけここで練習をしたいですね。

上村 コンサートホールで練習することによって、その響きに慣れないと。演奏家は誰もそうですが、慣れることによって自分で響きを捉えていかないといけませんからね。  
 京都芸大の学生たちもここでの演奏に期待感をもっていますし、大学としても定期演奏会をする予定です。

鴛淵 コンサートホールでパイプオルガンを演奏して、常にお客をいっぱいにするには、本当にいい演奏をしていくことが大事ですね。  
 井上 ミサじゃないから、朝というわけではないけれど、例えば昼休み時間には、パイプオルガンを必ず弾いているとかね。そうなれば、ブラツと聴きにくる人もいるだろうし、観光コースの昼食をホールのレストランで取り、見学がてら10分間ほど聴くとか。  
 上村 演奏時間を遅くするのもいいですね。7時半とか8時から始めるとか。京都ならできそうな気がするんですが。

●コンサートホールのある北山の環境は、いかがですか。

井上 新しいコンサートホールが立地の良い北山通にあるというのは、とてもいいです。

地下鉄の駅からすぐだし、植物園や資料館、陶板名画の庭などもあって、北山界隈の雰囲気はクラシック音楽によく似合ってますよ。鴛淵 便利なところですからね。その立地条件を生かして多くの方に来てもらえるようにしたいですね。  
 井上 音響が良くても、場所的に行きたくない、面倒くさい、文化施設の特別扱いされた、日常生活から隔離されたような遠い場所に建てられたホールが多いんです。これは大きな間違いですよ。  
 上村 コンサートのある日はみんながゆっくり帰るように、地下鉄の本数を増やすとか、帰りの交通手段も考えておかないといけませんね。拍手もそこそこさつと帰るなんてことになりませんから(笑)。でも、この辺りは植物園を散策したり、演奏会を聴いた後、レストランでワインを飲んだり、ということもできるからいいですね。コンサートプラスアルファがある。  
 井上 そう。そのプラスアルファですね。大切な友人たちとコンサートに出かけて、帰りに食事をしたり、飲んだりしながら楽しく語り合う。そんな場所があることは大切だし、そうした環境を整えば、音楽ファンももっと増えると思いますよ。コンサートホールができたことで、この周囲も新しく発展していくでしょうし、いい環境の中でいい演奏が聴けるなら、ここに来ないはずありませんよ。京都から音楽文化を発信していくには、演奏家だけでなく、聴衆の中にもパワーが生まれなければいけません。みんなでコンサートホールが擦り切れるほど使っていきたいですね。いい楽器も使えば使うほど、少しは擦り切れるけれど、それでいいんだから。

